

『学会見聞記』

第87回日本生理学会大会へ参加して  
The 87th Annual Meeting of the Physiological Society of Japan

田 口 廣 臣

金沢大学大学院医学系研究科脳医科学専攻  
脳情報分子学 修士課程2年

2010年5月19～21日の3日間、盛岡市の盛岡市民文化ホール(マリオス)並びにいわて県民情報交流センター(アイーナ)にて開催された第87回日本生理学会大会(主催:岩手医科大学, 大会長:佐々木和彦教授)に参加しました。今学会企画の主題は、「発生・分化・再生・恒常性維持の統合的ダイナミズム」であり、総演題数は特別講演・記念講演・シンポジウム・一般演題(口演並びにポスター発表)を併せて720題にものほりしました。内容としては、イオンチャネル・レセプター・トランスポーター、ニューロン・シナプス、感覚生理、循環生理、病態生理、細胞・分子生理、行動・生体リズムといった基礎医学分野から神経疾患、疾患メカニズム、脳科学の臨床医学への応用といった臨床医学に近い分野まで多岐に渡りました。いずれの演題も新しい知見や技術が盛り込まれ、大変興味をそそられる内容でした。私自身は、「ゼブラフィッシュの遊泳行動における網膜ドパミン系の調節作用」と題したポスター発表を行いました。具体的には、魚類網膜に僅かながら存在する網膜ドパミン産生細胞をその選択的神経毒である6-hydroxydopamineで破壊した個体やドパミン受容体(D1, D2)を薬理的に遮断した個体を用いて、正常個体との間に認められる遊泳行動の変化を様々な照度の下で撮影・解析・定量し、網膜ドパミン系と視覚機能との関係を主に「行動」という観点から考察したものです。ポスター発表の時間は1時間程度でしたが、沢山の方々を耳を傾けて下さいました。質疑応答では、特に実験方法(照度の条件、遊泳行動の解析及び定量法など)について数多くの質問や指摘を受け、非常に充実した有意義な発表となりました。中には、想定もしていなかったような質問をされた方もいらっしゃり、内心ヒヤヒヤしましたが、少しでも納得のいく回答ができるように自分の考えをはっきりと述べるという意味で、非常に貴重な体験になりました。数ある演題の中で私自身、感銘を受けたものとし、理化学研究所脳科学総合研究センターの山中宏二氏の「神経変性疾患におけるタンパク質分解異常」と題した講演があります。アルツハイマー病やパーキンソン病をはじめとする神経変性疾患は、細胞内での過剰なタンパク質蓄積が原因とされていますが、山中宏二氏はこの点についてプロテアソーム活性の観点から講演をされ、非常に興味深く、楽しんで拝聴できました。「21世紀は脳の時代」といわれるように、脳をはじめとする中枢神経疾患

の原因解明や病態解析、攻略法についての研究は非常に多く、驚きの連続でした。また、藤田保健衛生大学の日高聡氏による、セロトニン受容体と網膜神経節細胞の興奮性との関係についての講演は私の研究内容に通ずるものがあつたため、大変勉強になりました。今回、私は初めての学会発表であり、また足を踏み入れたことのない東北地方という地での開催とあつてか、終始緊張してしまい、あつという間に時間が過ぎていきました。しかし、今回このような場で発表する機会が与えられたこと、また数多くの方々からの貴重な指摘や助言を受けて有意義な討論が出来たことを嬉しく思います。勉強になることも多々あり、非常に充実した学会参加となりました。日頃より御指導並びに御助言頂いている教室の皆様、この場を借りて御礼申し上げます。

